

毎号約25編を45日おきに定期刊行することは軌道に乗っていますので、編集側に残された問題は早く審査過程を終了すること、写真の印刷の質を高めること、研究者の要求に沿った新たなサービスを考えて実行することなどですが、柴岡編

集長を中心として本年度から「速報」を加えたことは時期を得た企画と思います。一方、会員にはますます質の高い論文が毎号掲載されるように、研究の自信作を多数投稿されることを繰り返しお願いして、4年間のまとめとします。

新編集長です。よろしくお願いたします。

柴岡 弘 郎

今年の1月から Plant and Cell Physiology (PCP) の編集長をおおせつかり、今関英雅前編集長、編集実行委員の先生方にいろいろと教えて頂きながら、PCP の各号が予定通りに発行されるよう頑張っています。今更ご紹介するまでもありませんが、今関前編集長は、着任草々、長年の懸案であった PCP の大版化を実現させ、その後も、Content by Subject Areas を新設し、Subject Index を利用しやすいように変え、さらに Minireview や Rapid Report を導入するなど、矢つぎ早やに PCP の近代化と、読者へのサービスの向上を目指した改革を推し進めて来られました。私は実は4年前まで、編集実行委員として PCP の編集のお手伝いをしていましたので、編集長の業務について、ある程度理解しているつもりでしたが、いざ引き継いで見ると、まったく理解していたものとは違っており、この4年間、今関前編集長が、自分自身の負担が増加することを厭わず、サービスの向上に務めてこられたことがよくわかりました。ご挨拶の始めに、ちょっとばかりのうらめしさも込めて、PCP の改革に注がれた、今関前編集長のご尽力に対し感謝の意を表したいと思います。

さて、編集を始めて4ヵ月たった今でも、依然として、ハンドルをギュッと握りしめ、前方だけを見ながら運転している、若葉マークの編集長ですが、編集実行委員、編集委員、それに論文審査をひき受けて下さった方々、原稿をお寄せ下さった方々、読者の皆様の温かいご支援により、No.5 の原稿を印刷所に送り込む所まで辿り着き、一応、編集業務は正常に走り続けているように思います。となると、前だけでなく、周囲も見なければいけない。PCP をどう変えて行くのかを考え出さなければいけない。ということになるのですが、当たり前のことながら、PCP は編集長が独りでかんで見ても、投稿論文が変わらない限り変わらないし、編集長が変えまいと頑張っても、投稿論文が変われば、変わってくるものと思います。そういう意味では、PCP の将来は、会員の皆様次第ということになるのですが、編集長といたしましては、より良い原稿が集まり、それによって PCP がより良くなるように、PCP を魅力的にする工夫や努力をしなくてはならないと思っています。

そんな努力に関係のあることで、気になっていることに、Plant and Cell Physiology の誌名にしては、細胞関係の投稿論文が少ないことがあります。理由は単純ではないと思いますが、光学顕微鏡、電子顕微鏡写真の印刷に問題があることも、原因の1つのように感じています。写真の印刷の仕上がりを良くすると言ったような技術面での改良を通して、良い論文に逃げられないよう努力することも、PCP をより良く変えることにつながると思いますので、そんな所から手をつけて行こうと思っています。幸い中西印刷も、この件について前向きな姿勢ですので、なんとか改善したいと思っています。表紙に写真を掲載する雑誌がふえており、真似することに、魅力を感じないわけではないのですが、やはり、中身の写真がきれいになり、写真に凝る人たちが PCP に投稿したくなって、投稿論文の中に、表紙に使いたくなるような写真が溢れてこないが無理だろうという気がしています。言い換えれば、中身の写真の印刷を改善することによって、表紙に写真を載せられるような状態にしたいということです。

4年前の今関前編集長の就任挨拶の中には、PCP 編集手順や、印刷発行予定日程などの紹介も含まれていました。あまり、その時のものと変わっていませんが、表1および表2に示しました。新しく編集長や編集実行委員になった時、「の通りにやれば、出来ますよ。」とって渡されるのが表1で、確かに、これを見れば何とかなる良く出来たマニュアルです。

今関前編集長の時代に検討され、本年度から実行に移されたものに、Minireview と Rapid Report があります。これについて、すこしご説明いたします。Minireview は、最新の話題を刷り上がり6ページ以内にまとめたもので、執筆者は編集委員の推薦に基づいて、編集実行委員会で決めることになっており、1巻あたり2ないし3編掲載する予定です。Rapid Report については、新しくなった投稿規定にもその性格の一部が示されていますが、審査を迅速にするため、編集長が編集実行委員を務め(表1参照)、電話などで、あらかじめ了解を得た審査員に、3日以内に accept が decline かの判定をくだしてもらおうよう審査をお願いすることにしてお

表1 PCP 編集手順

1991.2

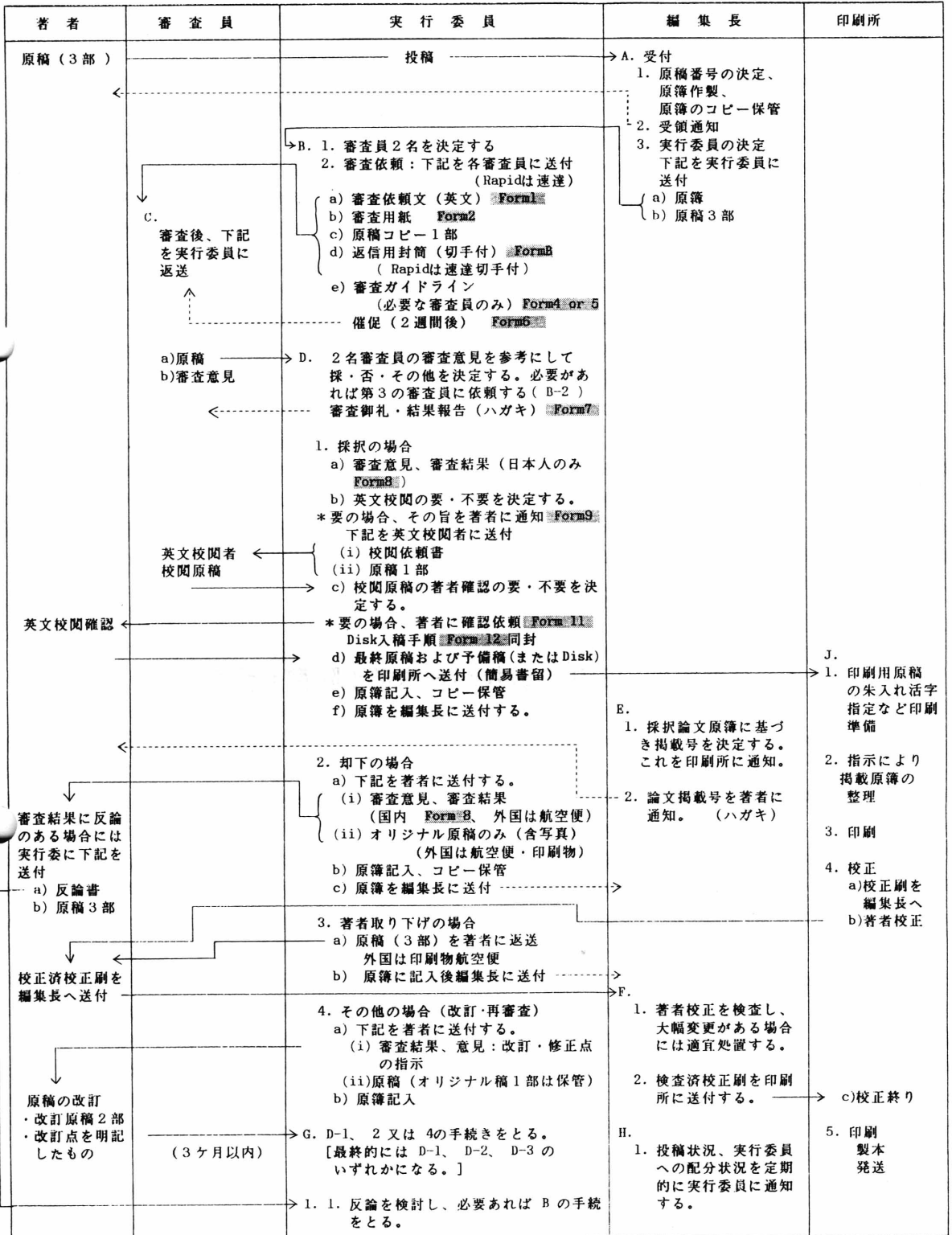


表2 印刷発行予定日程表

No.	原稿 締切日	最終著者校 発送日	編集長 責了日	印刷 発行日
1	11/15	12/29	1/10	1/31
2	1/5	2/20	3/1	3/20
3	2/15	4/1	4/10	4/30
4	4/1	5/15	5/25	6/15
5	5/15	7/1	7/10	7/31
6	7/1	8/15	8/25	9/15
7	8/15	10/1	10/10	10/31
8	10/1	11/15	11/25	12/15

ります。英文校閲は原則として行なわない方針で、内容は accept だが英文に難点がある場合には、著者に decline か英文校閲後の accept かを選択してもらうことにしています。このようにして、どの位の日数で掲載になるのかは、掲載可となった日付に大きく依存しています。例えば、表2の原稿締切日に掲載可となったとしますと、その75日後にその論文を掲載した号は発行されますので、論文受け付けから発行までは、80日と少し位ですみますが、掲載可が原稿締切日の翌日になりますと（実際には、印刷に間に合えば、なるべく早い号に載せるよう手配すると思いますが）、さらに45日程長

くなります。このように、発行までに要する日数は投稿の日付に大きく依存しますので、表2を参考にしてご投稿の予定をたててください。原稿締切日は、Rapid Report の投稿の際のみならず、通常原稿でしたら、英文校閲後のチェックを済ませた原稿を実行委員へ返却する際にも気にとめていただくと、発行までの日数が短くなります。

年会の折になど、よく、「今、PCP はすいていますか。」ということ聞かれます。混んでいると accept されても出版が遅らされるのではないかと心配からの質問だと思えますが、原稿締めきり日以前に accept された原稿はすべて印刷に回わすことになっており、原稿数が多いからと言って、その一部を次号回わしにすることはありません。すいているか混んでいるかなど気になさらないでどしどしご投稿下さい。また、やはり年会の折に、この点が気にいらないので、投稿しないのだ、ということも教えて下さる方も居られます。ご指摘いただいた点は、個人個人で異なり、必ずしも同じ方向の改善を希望している訳ではありませんので、ご指摘いただいたこと総てに対応できるとは思いませんが、PCP を良くして行くには、まず、PCP に投稿したくなる方々をふやすことなので、こう変われば投稿しようと思うというお考えを是非ともお寄せ下さいませよう願っています。

京都大学山田康之教授が日本学士院賞を受賞

京都大学農学部 佐藤文彦

このたび京都大学農学部山田康之教授の日本学士院賞受賞が決定されました。同教授の今回の受賞の対象になったのは「植物培養細胞における機能発現ならびに物質産生機構の解析」に関する研究であります。昨年度の田沢仁植物生理学会会長の受賞に引続く本学会会員の受賞に心からお祝いを申し上げます。

以下に同教授の略歴、業績等を紹介いたします。

山田教授は、大阪市に生まれ、昭和32年京都大学農学部農芸化学科を卒業後、同年同大学大学院農学研究科に進学し、奥田東教授のもとで研究者としての道を歩み始められました。同37-40年米国ミシガン州立大学フルブライト研究員を経て、同42年より京都大学農学部農芸化学科助教授として研究・教育に従事されるとともに、京都大学農学部で日本で最初の植物培養細胞を素材とした植物細胞生物学を研究する生物細胞生産制御実験センターの設立に尽力され、同57年センターの設立とともに教授に着任、同59年同センター長となり、

その発展に貢献されました。平成2年からは同大学農学部農芸化学科教授となり、現在に至っておられます。また、同教授は文部省科学官、科学技術会議専門委員、文部省学術審議会専門委員、先端科学技術大学院大学創設準備委員などを歴任して学術行政にも貢献されたばかりでなく、長年植物生理学会評議員として学会活動に多大の貢献をされてきました。

山田教授の今回の受賞の対象となった「植物培養細胞における機能発現ならびに物質産生機構の解析」に関する研究は、わが国においても植物細胞培養に関する研究が極めて限られていた約30年前から開始され、以来今日に至るまで、高等植物培養細胞における機能発現と二次代謝産物の産生過程の解析を中心としてなされてきた数々の独創的成果の上に成り立ったものであります。

イネ培養細胞あるいはプロトプラストからの個体再生の成功は禾穀類における細胞工学の先駆的業績であり、本手法を応用した非対称融合によって雑種イネ作出の基盤的技術が確